

## かいせつ

本著は、『古文書』・『口碑』・『故老よりの口伝』・『新編武蔵風土記』・『武蔵国郡村誌』・『金石文』等の史・資料を基に記述してみた。浅学菲才の小生の作文であるため、内容に誤りがあるとは存じますが、お許しを願います。

なお、本著には、主たる神社のみを記述したので、字【あざ】持ちの神社は、市内に沢山存在していますが、ここでは、都合により省略しました。

次に主たる神社の由来を掲げて参考に供します。

- 一、春日部市内の八幡神社について
- 二、春日部市内の香取神社について
- 三、春日部市内の雷電神社について
- 四、春日部市内の神明神社について

## 春日部市内の八幡神社について

春日部市内の八幡神社は、特に春日部氏の祖先である紀之国主で土佐日記の著者である『紀貫之【きのつらゆき】の祖、武内宿禰【たけのうちすくね】』を合祀しているのが特色である。

粕壁宿名主次郎兵衛が書き残したる『古文書』の中に次の文がある。

『春日部八幡宮、三所起源』

業平朝臣【なりひらあそん】の、いざ言問むと詠めし隅田川は今云所とは異【かわ】れり古【いにしえ】の陸奥【みちのく】に下る道筋は武蔵国埼玉郡春日部駅【うまや】、下総国葛飾郡小淵村にて今も古川を界とし、板橋を架【わた】せり此流を古利根川と云ふ古【いにしえ】の隅田川の跡、今は岡となりて其れに添ふ流れを古隅田川と云なり、昔、頼朝卿の時、春日部右兵衛尉【かすかべうひょうえのじょう】と云人此の岡に住み其子甲斐守実景【かいのかみさねかげ】は、三浦泰村と同じく鎌倉にて見罷えたる事、吾妻

鑑に識せり、然は有れど裔に治部少輔時賢と云人がこの所に残り居て、元弘元年に家を再起さると、鶴岡に祈りけるに神木の技裂けて飛び来たり一夜の程に根ざしける詳【さが】に依りて樹の本に八幡宮を勧請【みざまつり】て春日部社と称へ一荘の嵩神となし奉りき斯くて翌年新田義貞が北条高時を伐軍に与【くみ】して功【いさお】有ければ治部少輔【じぶしょうゆ】に任じ元の荘を返されけるが後に名和長年に属して亡び其子左近藏人【さこんくらんど】家綱は足利の放召人【ほうめしうど】となり、家絶えたる事、太平記に載せたるが如し、偕家綱が子世捨て人と姿を変【やつし】し此社の別当となりしとぞ其後此木無く枯れたりしが、其朽めより萌出て三本に分かれ困い一丈にもなりける故今に飛び银杏とは云なり、又時々社の辺りに轡の音するは、神の新方四十余郷をめぐらせたまふとなむ。

かすかべにても有てふ、すみだ川しるべ求めて、我も尋ねん。

嘉永六年二月十日

前権大納言藤原凌生

右は故関根松翁【名主次郎兵衛】より四条殿に乞い奉られるに彼君例弊使にて、此所を過ぎらせたまひて下し賜へる御文になむ、後醍醐天皇延元二年其所領別なりしをもて互ひに治る事難かりければ里人ら相はかりて今一社を元の春日部社の外にいとなむことと成れり、其地は内屋堤の辺なりしを後に里中に遷してより西社・東社と云ふ名字俗に呼ぶこととは成れり、其旧社は今猶新宿の社と云て小祠有り、神八幡宮と申し奉る。応神天皇・神功皇后におはしまして、武徳の御神なる事人の知るところなり、左の相殿には、玉依姫命、これ即ち巖島同体にして出雲大社大国主大神の後須世理姫命の御事なり、黄金白銀？堂給ふ神に坐が故に市店交事の守護神として市姫神とも称へ奉る事古記にみえたり、駅【うまや】の東西に此神のおわしまして土地の繁昌を現前にみる事不測の幽契と謂べし、然れば西社東社新宿社ともに同じ八幡の御神に坐せば歩みを運ぶ差別有べからず、西の御社は花に紅葉に匂い満て春秋の眺めるこよなく、東の御社は涼風を迎へ白雪をのぞみて、夏に宜しく冬に宜しく神徳といひ光景と云い実に関左の奇境なる者なつ

かし。  
鈴木重胤附云

とあり、粕壁の八幡神社、三社について述べられている。その中で元新宿八幡社は、冬。大砂の八幡神社は、夏。春日部八幡神社は春の宮と伝えられている。

## 春日部市内の香取神社について

春日部市内の幸松地区・豊野地区・武里地区・豊春地区に「香取神社」が祭祀されているが、本来「香取神社」は、下総国の守護神で総鎮守である。しかし、我が春日部市は、武蔵国に属しているのである。幸松地区・豊野地区は元は下総国に属していたので、この地域には「香取神社」が鎮守として祭祀されていても不思議はないが、埼玉郡に属する豊春・武里地区にも多くの「香取神社」が祭祀されているのは、何故であろうか。古代の歴史を辿ると古利根川【利根川の源流】の流れは湾曲して、春日部八幡神社の裏側を流れ豊春地区に注ぎ、さらに迂回して武里地区の薄谷を経て豊野地区の藤塚から今の

流れに沿っていたことが地形的に解明される。

このため川の東側が下総国とされていたようである。【最勝院の御朱印書に、徳川家光より出された文書に下総国埼玉郡糟壁町とある。】利根川の西側を武蔵国として行政区画をしていた時代があったらしい。このため「香取神宮」の勧請をして祭祀したか、または、下総国葛飾郡の住人が、この地に移住して来て、その人々の鎮守信仰から「香取社」を祭祀したと思考される。

本来、武蔵国の守護神は、氷川社・八幡社・久伊豆社等であると思考される。

## 春日部市内の雷電神社

春日部市内には、多くの雷電神社が祭祀されている。

昭和初期の学者、中谷宇吉郎博士の著書【岩波新書】『雷』の中で、関東地方の落雷の統計が書かれている。これをみると、栃木県・群馬県・埼玉県の秩父地方で発生した「雷」

は、その殆どが東京をめがけて通過していることがわかる。その進路の殆どが、荒川・中川【古利根川・元荒川】や、江戸川の流域に沿っていることが、この統計表に示されているのである。この流域に落雷が多いことがこの表でわかる。それ故かこの流域には、板倉雷電神社のご分霊を迎え祭祀されていることがうなずける。

歴史を辿り、地形から判断すると、古代は関東地方は海であったと考古学者は解説している。それによると、この時代の湾は、現在の鹿島灘であるという。その他は海であったという。海域は、群馬県板倉町の雷電沼【現在は埋め立てられて公園】は当時の海の入江であったが、海退が進み、下総台地や武蔵大地【大宮台地】が隆起して、その間を川が出来て流れ、荒川・利根川の水系が現れ南下して、現在の東京湾が出来、これに注ぐ大河の出現により、関東平野が開かれたといわれている。前述の『雷』の通過進路となった理由は、台地間の低地を流れる川に沿って気流が流れやすくなったので、この地方に落雷が多発していることがうなずける。

市内の雷電神社の場所は、その殆どが落雷によつて被害を受けた場所に祭祀されている  
ことで立証される。『雷電神社』の御祭神の名は、その地域によつて呼称が異なっている。  
例えば火雷大神・大雷大神・別雷大神・建御雷神等と称えられている。

## 春日部市内の神明神社について

春日部市内には、粕壁・内牧・豊春・武里地区に、「神明神社」が祭祀されているが、  
幸松・豊野地区には、小祠はあるが、それも僅かである。何故かと探究したところ、葛  
飾郡内は、葛飾郡内の総鎮守である、船橋大神宮【伊勢大神宮を朝日の宮・船橋大神宮  
を夕日の宮と伝えられている。】が古代から鎮座されていた故であろう。埼玉郡内には、  
「神明神社」が祭祀されているのは、やはり古代【平安期】から武蔵国に鎮座する大神  
宮があり、江戸時代に御祭神が、大日靈貴尊【天照大御神：あまてらすおおみかみ】で  
江戸庶民から親しまれていた神社【通称：芝神明大社】からご分霊を勧請して祀られた

ものが「神明神社」であろうと思考される。江戸時代は「伊勢参り」が盛んで、「一生に一度は、お伊勢さんに」と言うのが庶民の願いだった。しかし、東国から「伊勢」は遠く、「伊勢参り」は多額の費用と、多くの日数を要し、とても一般の庶民には高嶺の花、村の有力者でさえ、やっと一生に一度の「伊勢参り」が出来る程であった。そこで、庶民は同じ御祭神の「芝大神宮：芝神明神社」にお参りが盛んになったと、伝えられている。

## あとがき

歴史の勉強をしていると、何故、どうして、という疑問が出てくる。小生も何回となく、このような疑問に直面して、史・資料【歴史書・伝説・口碑・古文書・金石文・故老よりの口伝等】の探究に入り、何とかして春日部市内の郷土史を作成してみようと心掛けていた。市役所を定年退職してから、手探りで「ワープロ」の操作を覚えたので、以前から話を聞いていた事柄を思い出して、記憶を辿り、これまでも幾つかの資料を作成してきた。

今回は、現職当時【春日部市史編纂室長】時代に、民族部門の調査資料として作成してきた。

引書の中の、信仰伝承として著作した文を参考に次に掲げる。

民俗資料調査のうち、信仰伝承は、儀礼伝承と共に重要な要素を持つものである。「敬神」「崇祖」の精神的教育によって往古から培われてきた。我が国民の美德である。『村』

の鎮守を基本とした「氏神信仰」・寺と檀家組織【宗門人別：現在の戸籍】の関係によって結ばれた「仏信仰」・有名な神社や寺院へ参詣する慣習的な代参講等による信仰が伝承されている。いわゆる自然宗教による信仰であって、現世利益的・流行的性格を持つ信仰伝承である。それにもなつて民間信仰・俗信は一般民衆の心意の中から生まれて伝承されてきた。また、呪術・占い・禁忌等は業者や巫女などから広められて伝承され、民間医療信仰も伝承され、民族知識も普及され伝承されてきた。このように信仰伝承は、自然宗教・原始宗教が基本となっている。

創唱宗教【教祖・教典を有する宗教】とは、異なつた信仰のところが多いのが特色であろう。と記述している。

今回作成した『春日部の神社』も「敬神。崇祖」の考えから記述を試みたものである。今後の生涯教育・社会教育の参考に利用して頂ければ著者として幸である。

平成六年十月

須賀芳郎著